

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

9

Vol.47 No.9 SEPTEMBER

2024

家族会と共に歩む



連載

ひらめく かがやく 子どもの力
子ども療養支援士との協働

予後が厳しいケースに多職種で向き合った経験

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第38回 公認心理師たらしめるもの

公認心理師を目指す若者たちに話をさせていただいた。私自身が公認心理師であるにもかかわらず、面接室の言葉だけのやりとりが自分探しやよい気づきをもたらすという考え方には懐疑的である、という話をした。若者はぎょっとした表情をする。

大学教授で随筆家の有吉玉青さんも、ある雑誌で「自分の中のもう一人の自分に気づいたとき、人は対処のしようがない」と書き、その一例に、妻を亡くした男性が、探偵から誘導尋問をされた結果、妻の死を願っていた自分に気づいたことを挙げていた。臨床に出れば、このような話はごまんとある。介護していれば、子育てしていれば、結婚していれば、誰かと付き合っていれば、愛憎渦巻くしがらみに、「この人さえいなければ」と思う瞬間が訪れる。でも、だからこそ次の瞬間、その後ろめたさから優しくなれる。そういうことは名だたる小説家が散々書いている。歴史を通じて繰り返し書き残されている苦悩は、宇宙人ではなく、人間の相談に乗る限り、現在も話題になるに決まっているのである。ゆえに、私は若者に本を読むことを推奨している。

もうひとつ、私は、自己理解や気づきが深くないとよりよく生きられない、という前提がカウンセリングにあるのならば、注意しなければならぬと考えている。カウンセリングで患者が心の鎧(防衛機制)を脱いで、自分探しの旅に出たものの、ろくな自分が見つか

らないのはよくある話で、旅の果てから戻ってこられず、自死を選んでしまうケースがある。そして、患者本人が亡くなったことを知らない公認心理師は、同じようなカウンセリングを別の患者に対しても繰り返していることがありえる。自分と向き合う、あるいは理解するという聞こえはいいが、それと同じくらい、逃げ切る、あるいは知らないふりをするということもまた現実には大事だからである。特に、カウンセリングを求めにくるような知的にセンシティブな人たちのなかには、公認心理師よりも自分自身について気づきが深い人がいる。

私が大学院生時代に印象に残った教員の言葉は、患者に「自信のない姿を見せなさい」というものであった。実際、私は小児がんの子どもたちから「えー、クッキー、作れないの?」と言われてたり、「私、織物できるんですよ」などと自慢されることがある。これに関しては演出ではなく、まったく子どもたちのほうが私より芸達者なのである。そして、たまに私が相談コーナーを設けると、子どもたちは列をなして並んでくれる。結局、小児がんの子どもとその家族が、私を公認心理師っぽく仕立ててくれるのである。

という気づきを、子どもたちは私にもたらししてくれる。そのような気づきを重んじる私は、やはり公認心理師なのかもしれない。

佐藤聡美

さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)、第41回とやま賞受賞。